

Generalized Conversational Implicature の再考察

井 谷 玲 子

1. はじめに

この研究ノートにおいて、Grice (1975) の提案している発話の暗示的内容の一つである Generalized Conversational Implicature (=一般発話の含意：今後 G. C. I.) を、人間の認知という点から考察する。G. C. I. という含意は、例えば(1)の接続詞 ‘and’ 使用から(2)で見られる ‘and then’ の意味が、方法の公理 (manner maxim 中の順序立てて話せ) を基に推論し発話の含意 (=暗示的意味/言外の意味) として派生されるとするものである。

(1) Tom took out the key and opened the door.

(2) Tom took out the key and (then) opened the door.

まず、人間の認知について簡潔に言及し、本論文の理論的枠組となる認知語用論理論上の概念である最適関連性を論じる。さらに発話の明示・暗示的内容の区別を示し、Grice の暗示的意味としての G. C. I. の問題を挙げ、G. C. I. は、実際、発話の明示的意味であり含意ではないことを Carston (1990) の表意 (Explicature) という概念を使い証明してゆきたい。

2. 人間の認知と発話

人間の認知 (脳) は情報を処理したり送り出したりするが、その情報源となるものには何が含まれるであろうか？ まず我々の5感 (視覚, 聴覚, 触覚, 味覚, 臭覚) を使い知覚可能な、物理的世界というものが挙げられる。その中には、勿論、人間の行動が含まれ、それは意図的行動とそうでないものに分けられる。人間の意図的行動は、さらに、意図明示的行動 (Ostensive behaviour) とそうでないものに区別される。

前者は行為者の意図が明示的に相手に伝わっている場合であり、後者はそうでない場合である。例えば、Peter-Maryの夫婦間で、Maryが壊れたオーブンをPeterに修理してもらいたいのは山々だが、機械が苦手であると認めたくないプライドから、Peterに面と向かって「又、オーブンが壊れているわ。」と言うのではなく、Peterが台所に入ってくるのを見はからって、一人言として上記の発話を言いPeterに聞かすとする。この場合、Maryの「オーブンを修理してもらいたい。」という意図は明示的にPeterに伝えられていない。PeterがたまたまMaryの発話を聞き、修理するしないの判断はPeterの好意のみにかかっており、聞かない振りもできる。これに反して、Peterに向かつて発話されている場合は、Peterはその発話の意図（何故Maryがそう言ったか）を推しはからずにはいられないであろう。なぜなら話者の発話行為の意図が明示的にPeterに伝えられているからである。つまり発話には意図明示的なものとそうでないもの¹⁾がある。本論で発話とするものは意図明示的行動としての発話に限りたい。

さて、人間の認知に関してであるが、次の二つのことが基本的事実として見れる。一つは人間の認知は、世界についての正確で、証拠に裏づけられた、一貫性のある表記（知識）を積みあげて行こうとする。つまり、世界についての正確な知識を、人間が生きている間に、得て行こうとするものである。二つ目は、人間の認知（脳）の処理手段には、記憶、注意力、探索メカニズム、推論能力などがあるが、これらは有限のものである。例えば、疲れている時は注意力は落ち、普段、聞きとれることが聞けなかったり、聞いたことを覚えたり、思い出したりする能力も落ち、考える能力も落ちる。又、人間は、いつか衰え、死ぬ運命にあり、永遠に知識を積み重ねて行くことができないという意味でも有限といえる。

さて、有限の情報処理装置としての人間の認知は、経済的に効率よく世界についての知識を蓄積していくと想定される。世の中の事象全てに注意を向け、役に立つか立たないかに関わりなく処理していくのではなく、ある個人の認知に何らかのインパクトをもたらすような関わりをする関連ある情報に注意を払い、処理すると想定される。即ち、認知は関連性ある情報をピックアップするようできているということにな

る。

認知語用論理論である関連性理論は、関連ある情報というのを次のように定義し、今まで、Grice など関連性の重要視はするが（協調性の原則の中の関連性の公理参照）、直観的な理解にとどまっていた状況を革新した。関連ある情報とは、認知（文脈）効果に豊かな情報で、既存の情報を強化（確認）したり、矛盾する情報を排除したり、既存の情報と結びつきさらに新情報（文脈含意）を導くような情報の三種類を言う。さらに重要なことは上記の三つの場合の認知効果をもたらすにあたり、不当な処理労力をかけておらず、効率よく情報処理が行われているということである。

発話というのは特別な情報源である。一つは Mary の発話例で見られるように、発話により話者の意図が明らかに伝達されている点で特別であり、又、文法というコードによってコード化された内容をもつという点でも特別である。さて次に発話解釈と先に述べた最適関連性について説明しよう。

3. 発話解釈と最適関連性

発話解釈において、指示的不明瞭な点や曖昧性、省略などを解決すべく推論が聞き手の認知プロセスとして行われる。例えば、(3)において代名詞 she が誰を指すか、又 admit が認める／入場（国）許可するのどちらの意味か、enough の後に、何が省略されているかなどが解決されなければならない。

(3) She has admitted enough.

これらの推論はある方向性を持ってなされる。例えば警官に尋問されている女性についてのコンテクストの場合、she は日本国と同定されることはない。(3)における様々な不確定性の解決は、その命題内容がその状況に関連ある情報内容となるよう方向づけられている。

関連性理論の観点から述べると、ある発話がある解釈において最適関連がある時の条件は以下である。

- a) 発話が聞き手の注意に値するだけのインパクト（文脈効果）を彼の認知にもたらず。
- b) 上記の効果をあげるにあたって聞き手に不当な労力をかけない。

全ての発話は最適関連性を伴うとする関連性の原則に従って(3)を解釈すると、上記のコンテクストにおいては、(5)より(4)の方が関連ある解釈ということになる。

(4) Mary Smith confessed enough evidence.

(5) Japan let in enough refugees.

(4)はこれで捜査終了というインパクト（文脈含意）が容易に導かれるが、(5)の方は上記のコンテクストにおいての効果は期待できそうにない。多大な労力を使い(5)という解釈にたどりついたとしても、その労力に見合う効果が一つも出てこず、関連性の原則に見合っているとは言えない。余分な処理労力というのは、それを償う余分な効果によって相殺されなければならないのである。

今度は二つの発話を比べて上記 b) を説明してみよう。例えば、発話 U_1 と U_2 があり、両方共、ある内容（想定）を伝えるとする。しかし、 U_2 の方が、 U_1 よりも解釈に労力を要するとする。下記(6)~(8)の $U_1 U_2$ の例である。この場合、余分な労力のかかる U_2 の方が、余分な効果をあげることが関連性の原則から予期される。

(6) Can you have lunch with me tomorrow?

U_1 : I can't.

U_2 : I have to go to a meeting over the lunch-hour.

(7) U_1 : In London it's cold and raining.

U_2 : In London it's cold and raining, raining and cold.

(8) U_1 : I haven't seen my brothers and sisters for many years.

U_2 : I haven't seen my siblings for many years.

(6)において U_2 は、ランチに行けないという返答と同時にその理由を伝えるので、 U_1 よりも丁寧な断わり方だと言えよう。(7)においては、“raining and cold” の繰り返し部分により、非常に寒く、雨が強く降っていることを伝える。又、(8)においては、“siblings” という頻度の少ない単語を使うことによりフォーマルな話者の態度を伝えるようだ。

さて、上記で関連性の原則を述べた。繰り返すと：

—関連性の原則—

全ての発話は最適関連性の期待を生み出す。

この原則は、全ての発話が必ず関連あるものであると唱えているが、

実際そうでないことは周知の事実である。例えば、明日ピクニックに行く友達に「明日は晴れる」と教えてあげたが、もうその友達はその情報を知っていたとする。楽しい一日となる等の含意が期待でき話者は発話したのである。これは文脈効果がないか少ない発話であり、偶然、関連性の無いものとなった例である。

又、話者が意図しないのに最適関連性となる発話もある。例えば、聞き手の幼い子供、及び聞き手の同僚の名前が同じ Peter であるとする。このコンテキストで次の発話を職場で聞く。

(9) Peter has broken his leg.

親として幼子の Peter と解釈すると多くのインパクト（文脈効果）が出るが、話者が保育園にいる子 Peter に何がおこったなど知りえない状況から、この解釈を期待出来なかったとする。この場合、話者が意図しない解釈が最適関連あるものとなったのである。

上記の偶然関連無い発話となった場合においても、聞き手の意図しない解釈が最適関連ある発話である場合も関連性原則違反となっている。前者は十分な文脈効果を達成しないであろうし、後者は最適関連ある発話は、話者が意図してなく、「同僚の Peter が足を折った」という解釈が十分な効果を導き、話者が意図したにちがいないものだからである。

このような発話は珍しいものではなく、両方の場合、聞き手は一貫性のある当を得た解釈をするのである。前者の場合は実際話者が意図した文脈効果はなくても、発話の主旨は組みとり自分の行くピクニックのことで天気を気にかけてくれる話者に対して好感を持つであろう。又、後者の場合は、話者が意図出来た解釈を探し、その解釈で十分な文脈効果を達成するであろう。つまり同僚の Peter が足の骨を折ったという解釈で、見舞に行こう等の含意を達成するのである。

では実際発話解釈の基準は何であろうか。関連性理論は次の基準を設けている。

——関連性の原則との一貫性という語用論的基準——

発話がある解釈において関連性の原則と一貫性があるのは、話者がその解釈が聞き手にとって最適関連あると合理的に予期しえた場合のみである。

これまで、Grice に替わる発話解釈の基準につき論議してきたが、G.

C.I. という含意について考える時、発話の明示／暗示的内容について考える必要がある。次のセクションでこの点を論じる。

4. 明示的伝達と暗示的伝達

Sperber & Wilson (1986, 175) によると、言語伝達は一番強い伝達形式であるとする。なぜなら非言語伝達が暗示的内容しか伝えないのに対し明示的内容を伝えるからである。この明示的発話内容と暗示的発話内容の違いは、言語コード（文法）の解読から出る意味論的意味と、認知プロセスである推論から出る語用論的意味にしばしば対比される。

Grice はこれらの対比を saying（言うこと）と implicating（含意すること）の対比とみなし、発話の明示的／暗示的内容を次の専門用語を使い論じている。

What is said（言われたこと）：文法コードから解読された内容に曖昧性解決、指示語同定（identity）というプロセスを加えその発話の真価値条件的内容となるもの。

Conversational implicature（会話の含意）：What is said, 語用論的公理、そして一般知識を基にして推論を行ない、さらに伝達される想定。

上記の Grice の対比の問題点の一つは、暗示的内容（即ち含意）を得る時のプロセスである推論が発話の真価値条件的内容を得るのに用いられていることである。例えば、bank（銀行／土手）のどちらかを選ぶ曖昧性解決や he she の指示対象を決定する時に文脈情報を基に認知プロセスが用いられることは事実である。これらのプロセスは発話の暗示的内容を得るプロセスと同じであり、文法コード解読／推論が明示／暗示的内容という対比はぼやけてしまっていることである。また Grice が論ずるより What is said（＝真価値条件内容）の命題はより不確定的であることがわかる。つまり、文法コード解読、曖昧性解決、指示的对象同定というプロセスだけでは発話の真価値条件内容つまり命題内容を回復できないということである。例えば(10)を考えよう。

（学生Aが先生Bに）

(10) Frankly, I can't finish by tomorrow.

この場合、What is said と What is implicated の対比は以下となる。

What is said : A cannot finish her essay by the next day.

What is implicated : B should extend her essay deadline.

これらの内容が聞き手に強く伝わるわけであるが、What is said の内容で her essay という省略部分回復が行なわれているのみならず、by the next day の時制の指示解決も行なわれるので、Grice の曖昧性解決と指示対象同定だけでは発話の命題内容はまだ不確定なものとしかならない。

さらに(10)の発話は次のような想定(内容)も伝達しているようである。

(1) A is telling B frankly that she cannot finish the essay by the next day.

(2) A believes that she cannot finish the essay by the next day.

(3) A regrets that she cannot finish the essay by the next day.

(1)~(3)は What is said 内容を補文にとっており、率直にそれを言ったのだということや、それを信じていて後悔しているという命題態度を伝えている。(1)~(3)は Grice の枠組では What is said になるのだろうか。それとも What is implicated となるのであろうか。Grice の分析では(1)~(3)のような内容を捕らえることができないという問題がある。

では関連性理論では発話の明示的/暗示的内容の対比はどのようになっているか考察しよう。この認知語用論の枠組ではまず以下の対比を挙げている。

Logical form (論理形式) : 文法コード解読内容

Proposition expressed (発話の命題内容) : 発話の真価値条件的内容を構成し、論理形式から語用論的(文脈的)に発展したもの。

まず上記を区別し、さらに、明示的に伝達される内容と暗示的に伝達される内容の区別をしている。前者は Explicature (表意)、後者を Implicature (含意) と対比している。何故伝達されるというのが重要であるかという、全ての発話の命題内容(=真価値条件内容)が聞き手に伝達されるべくものではないからである。例えば、メタファー(14)の命題内容は偽であり、(10)の発話のように話者が意図するものとはならず、

聞き手に伝達されるものとはならない。

(14)が明示的伝達するものというのは、命題内容を補文にとった(15)(16)というものである。

(14) John is a lion. (勇敢な John について述べる)

(15) The speaker is telling the hearer that John is a lion.

(16) The speaker does not believe that John is a lion.

(17) John is brave.

(15)~(16)は聞き手に明示的に伝達され、Explicature となり暗示的に伝達される Implicature (含意) 例えば(17)と対比される。以下、表意/含意の対比を挙げる。

Explicature (表意): 発話の命題内容 (伝達される時) と、それを、saying/telling などの発話行為記述, 又, believe, doesn't believe, regret などの命題態度記述に補文としてうめ込んだもの。

Implicature (含意): 表意ではない伝達される想定 (内容)。

この枠組においては Grice が捕えることができなかった(11)~(13)内容は Explicature (表意) となり、発話の明示的内容として見なすことができ、メタファーの場合の命題の位置づけもはっきりしてくるのである。

さてこの研究ノート of 論旨である G. C. I. を扱う上で Explicature (表意) が重要な概念となる。次のセクションで考察する。

5. G. C. I. (=Generalized Conversational Implicature) は存在するか?

命題 P, Q を連結し P & Q とした時に Grice は次のような含意が What is implicated のレベルで派生すると論じる。

What is said : P & Q

What is implicated : P before Q

P caused Q

P enabled Q

上記の What is implicated の三つの G. C. I. にそれぞれ英語の例文を当てると次のようなものになる。

(18) He handed her the key and she opened the door.

communicates : He handed her the key and then she opened the door.

(19) He became an alcoholic and his wife left him.

communicates : His alcoholism caused his wife to leave him.

(20) I left the door open and the cat got in.

communicates : My leaving the door open enabled the cat to get in.

G. C. I. は特定の文脈によってさまたげられない限り、推論により派生するものとされる。

しかしながら Grice の G. C. I. の分析には問題がある。例えば What is said の発話の命題レベルでは、(21)(22)は矛盾文、余剰文となるはずである。なぜなら、話者は not (P & Q) ; Q & P, Either (P & Q) or (Q or P) と断言しているからである。

(21) He didn't steal some money and go to the bank, he went to the bank and stole some money.

(22) Either he became an alcoholic and his wife left him or she left and he became an alcoholic.

では(21)(22)は矛盾、余剰的に聞こえるだろうか。日常よく聞く発話であり、解釈も特に困難なものではない。実は(21)(22)の What is said の内容が not (P & then Q) ; Q & then P, 又 Either (P & therefore Q) or (Q & therefore P) であるため、矛盾文、余剰文となっていないのである。

さて、P & then Q や Q & therefore P は発話の表わす論理形式から発展したもので、関連性理論の枠組では先に述べた Proposition expressed (発話の命題内容) となる。つまり、Grice のように含意として発話の暗示的内容として捕らえるのではなく、明示的内容つまり Explicature として捕らえられているのである。セクション題目の質問への答えは No ということであり、これは前セクションで述べた発話の命題内容は不確定的であるという Grice が見落としている事実に結びつく。つまり、接続詞 'and' は連結機能&から命題レベルで様々な意味に富化され、それは次の下線部に表わされた富化に相当するのである。

(23) She opened the card and then read the message in it.

- (24) I'll give you \$10 if and only if you paint my room.
 (25) She has exactly three children.
 (26) She needs at least three A's to get into Oxford.

Grice は(23)~(26)の下線部の意味を G. C. I. として扱うであろうが、(23)~(26)は発話の論理形式から文脈情報を基に発展したもので明示的レベルで捕える方が直観に沿っている。It is hot in here という発話が文脈によっては、Open the window please を含意するという事とは明らかに異なるのである。

この研究ノートにおいて、Grice の言う G. C. I. は存在せずこれらの意味は発話の命題内容、つまり明示的レベルで捕える方が妥当であることを示した。この結論は、本来 Carston (1988) の鋭い洞察である発話の命題内容は実はもっと不確定的であるという発見に帰因するところである。長年にわたり、言語コードに重点を置いてきた結果、発話解釈における推論という役割が、命題内容回復というレベルで軽視されてきた。この推論というプロセスの重要性は、発話解釈を情報処理プロセスとして認知プロセスと捕える関連性理論が必然的に行きついたところである。

言語学における意味論、語用論の区別は、従来の発話の命題／発話の含意という区別ではなく、文法コード解釈／推論という認知の異なるプロセスに基づいてなされるべきである。私はこの認知言語学上の区分が今後主流になって行くと信じており、又それが意味論、語用論の区別の土台にならずとも、人間の認知構造を少しでも明らかにしたという功績を称えて認知科学のますますの発展を祈りたい。

追伸：これは1992年11月慶応大学言語文化研究所で行なわれたロンドン大学 Robyn Carston 氏の講演をまとめ彼女の論点をより広く読者に理解して頂く目的で日本語にまとめたものである。

注

- 1) 全ての一人言が意図明示的でないとは限らない。一人言で聞き手を自分本人とし、その相手に意図明示的発話行動を行っているとしてもできる。例えば、

Mary : あの本何処に置いたのかしら？

Mary : そうそう, かばんに入れたんだわ。

参考文献

Carston, R. 1990. Quantity maxims and generalised implicature. *UCL Working Papers in Linguistics* 2, 1-31.

Grice, P. 1967. Logic and conversation. The William James Lectures. In : P. Grice. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass : Harvard University Press.

Sperber, D. and Wilson, D. 1986. *Relevance : Communication and Cognition*. Oxford : Blackwell.